●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 9－3

誕生日

目次

要　約 …… 2

はじめに …… 6

1．子どもの楽しみにしている日 …… 7

● 楽しみにしている日 …… 7

2．伝統行事を追って …… 10

● お正月 …… 10

● 節分、お彼岸、お盆、十五夜 …… 12

● 神仏と慶祝 …… 13

● 七夕、ひなまつり、子どもの日 …… 16

3．外国から来た行事をめぐって …… 19

● 母の日、父の日 …… 19

● クリスマス …… 21

● 大晦日 …… 22

● バレンタインデー …… 23

4．誕生日をめぐって …… 28

● 誕生日プレゼント …… 28

● 自分の誕生会 …… 32

● 友だちの誕生会 …… 37

● 担任・両親の誕生日 …… 41

おわりに …… 46

地球社会の子どもたち ⑭
日本－その1　子ども論の系譜 …… 深谷昌志 …… 47

資料1　調査票見本 …… 51

資料2　学年・性別集計表 …… 61

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

調査レポート
誕生日
要約

東京学芸大学教授　深谷和子
横浜市立鳥が丘小学校教諭　戸塚　智

1．調査の目的

子どもの日常生活に色どりと「節目」を作る種々の行事を、子どもがどのように体験しているかを明らかにする。

2．楽しみにしている日

子どもが楽しみにしている行事のベスト5は、「夏休み、家族旅行、クリスマス、お正月、誕生日」である。（図1）

3．お正月

お正月に必ず「おそなえをかざる」家は51%、「おとそを飲む」家は19%、「たこあげ、はねつき、コマまわし」をする子は15%、「父親が着物を着る」家は4%。（図2）

4．お彼岸

お彼岸に必ず「お墓まいり」をする家は27%、家で「おはぎを作る」のは16%。（図５）

5．仏壇

仏壇のある家は35%、それを「毎日・たいていおがむ」両親は72%、子どもでおがむのは53%。（図８）

6．母の日、父の日

母の日に必ず・わりと「プレゼントをする」子は55%、父の日49%。いずれも女の子のほうがしている。
（図15、図16）

7．クリスマス

毎年必ず「ケーキを食べる」家は77%、「親からクリスマスプレゼントをもらう」子も68%、「クリスマスツリーをかざる」家は47%。（図17）

要　約

8．バレンタインデー

前回のバレンタインデーに、父親にチョコレートをあげた子は91%、担任の先生(男)23%、自分の好きな男の子29%(表４)、女の子で、とにかく誰かにチョコレートをあげた子は84%（図19）、男の子で、誰かから１個にせよチョコレートをもらった子は51%。(図20)

9．誕生会

禁止している学校は７%、はでにならないように注意している学校が６%、全体としては自由にさせている学校が多い。(図24)

10．誕生会とプレゼント

クラスで誕生会をしているのは15%(図25)、家でした子は28%(図26)、１年間で友人によばれる回数の平均は２回(図32)、自分の誕生会によんでおみやげを持たせた子は80%(図31)、よばれたとき持っていくプレゼントの額は平均747円。(表15)

●調査概要

1.調査主題　「誕生日・記念日」

2.調査視点　誕生日を始めとする、子どもにとっての「特別な１日」を、子どもはどのように受けとめているか、そして、子どもを取りまく周囲（家庭）のあり方を探っていく。

3.調査項目　楽しみにしている日、お正月にすること、バレンタインデーにすること、ひなまつりにすること、子どもの日にすること、母の日にすること、クリスマスにす

11. 両親の誕生日

父親の誕生日にも、ほとんど特別のごちそうが出ない家は24%、母親も25%、父親にカードやプレゼントをあげない子は42%、母親40%(図40、図41)、自分にはしてもらうが、親や担任にはそれをしない自己中心的な子も多いようである。

12. まとめ

誕生日、伝統行事、外国から入ってきた行事の演出を工夫すると共に、その中に「心をこめる」こと、すなわちこうした行事を楽しみのためだけでなく、他人への愛や感謝の表現の手段とすることをもっと教えるべきだろう。

ること、年末にすること、誕生日の様子など。

4.調査時期　1989年1月

5.調査対象　東京都、千葉県、神奈川県の小学4・5・6年生

6.調査方法　学校通しによる質問紙調査

7.サンプル数　(人)

学年／性	男　子	女　子	計
4　年	177	214	391
5　年	210	177	387
6　年	206	183	389
計	593	574	1,167

はじめに

子どもの頃の「お誕生日」は、何であれほどピカピカな1日だったのだろう。誕生日でない日々だって、今思えばよろこびと明るさにあふれた毎日だったが、誕生日はそのどの日とも違う「特別の」日だった。たくさんのプレゼント、お祝いの言葉、家族から友だちからのそれは、全世界をおおうもののように思えた。そして親しい友だちをよんでの誕生会。その頃は確かクラスでも、1か月分をまとめて数人が前へ出て、拍手などをもらったことがあった。

子どもの成長とは、本人にとっても周囲にとっても、それほどよろこばしいことなのであろう。しかし現在はどうか。年を重ねるのはいつの頃からか、それほどのイベントではなくなった。毎日決まってやってくる、ふつうの日になってしまった。そして次第にそれは、苦痛な1日ともなってゆく。それは馬齢を重ねるわが身への恥じらいだろうか。

その「特別な1日」は、豊かな社会に生まれた子どもたちにとって、どうなっているのか。また誕生日以外にもあるはずの子どものイベントは、生活の中でどのように位置づけられ、子どもにとってどんな意味をもつものになっているのか。

調査の対象となったのは、東京、千葉、横浜の小学4～6年生の男女計1,167名。調査時期は、1989年1月であった。以下、そのデータを紹介していくことにしよう。

1.子どもの楽しみにしている日

楽しみにしている日

1年の流れの中で、子どもたちはどんな日を楽しみにして生活しているのだろうか。図1をみると「とても楽しみ」とする者が7割以上の「特別な日」ベスト5は

1.夏休み
2.家族旅行
3.クリスマス
4.お正月
5.誕生日

となっている。「遠足」は6位で、昔、家族旅行がこれほど一般化しなかった時代なら、これが上位にきていたのではなかろうか。同様に「運動会」も11位。また大正や明治時代であったら特別な日だったに違いない「お盆」「ひなまつり」なども、輝きを失って下位にいる。中学生になったら浮上するはずの「バレンタインデー」も、この年齢では1割でしかない。

また全体でこうしたイベントは、学年と共に少しずつ色あせてゆく傾向にある。**表1**が示すように、とくに6年生になると急に数字が下がる。また男子と女子では

男子の楽しみな日	女子の楽しみな日
お正月、子どもの日	誕生日(自分、家族とも) 誕生会、家族旅行 クリスマス バレンタインデー ひなまつり、母の日

となっていて、女子のほうが圧倒的にそうした「特別の日」を持っていることがわかる。男子女子間で差がないのは、「運動会、遠足、母の日、夏休み、お盆」である。

図1　楽しみにしている日

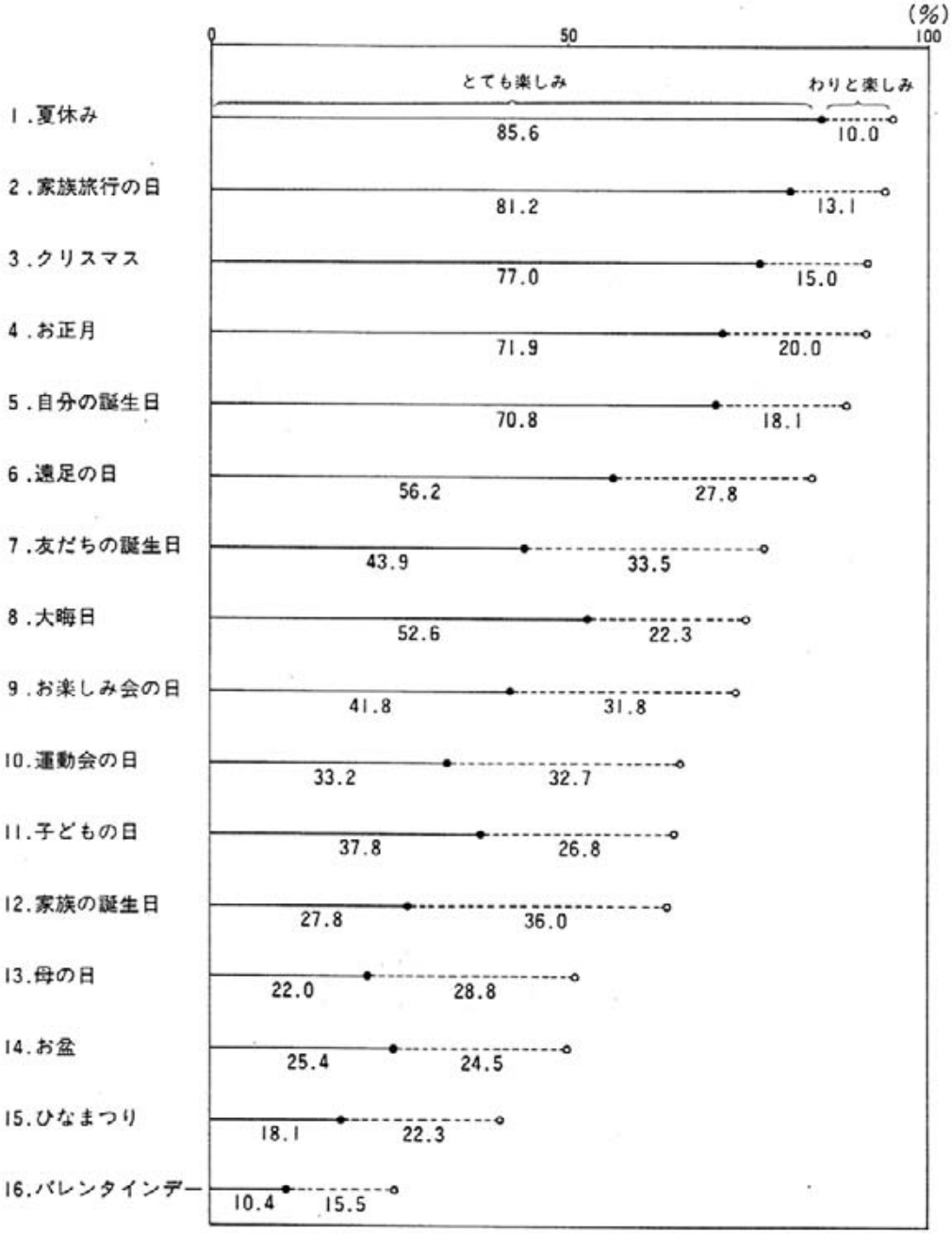


表1　行事×学年

(%)

	4　年	5　年	6年
1.夏休み	90.2	88.3	78.3
2.家族旅行の日	83.8	86.5	73.3
3.クリスマス	88.1	78.3	64.8
4.お正月	76.9	71.9	66.5
5.自分の誕生日	82.0	74.7	55.7
6.遠足の日	68.9	63.5	36.3
7.運動会の日	43.7	39.4	16.5
8.子どもの日	46.9	40.1	26.3
9.ひなまつり	23.1	21.8	9.6
平　均	67.1	62.7	47.5

「とても楽しみ」の割合

2. 伝統行事を追って

昨今われわれの日常は節目のない日々、という言葉で形容されるかもしれない。おとなと子ども、男と女、春夏秋冬、日中と夜、堅気と玄人、善と悪、その他あらゆるものの境界が失われ、いわば「けじめ」が失われた時代の中にいるように思われる。昔の日本の人びとは、四季の移り変わりの著しい地域に暮らして、とりわけ季節行事を大切にした。しかし気がつけば、われわれの生活の中にはそうした行事が次第に姿をひそめ、また少なくともその行事の中にこめられていた「こころ」は失われ、演出だけが残っているかのようにも思われる。以下、いくつかの伝統的な行事をとり上げて、その様子をみてみよう。

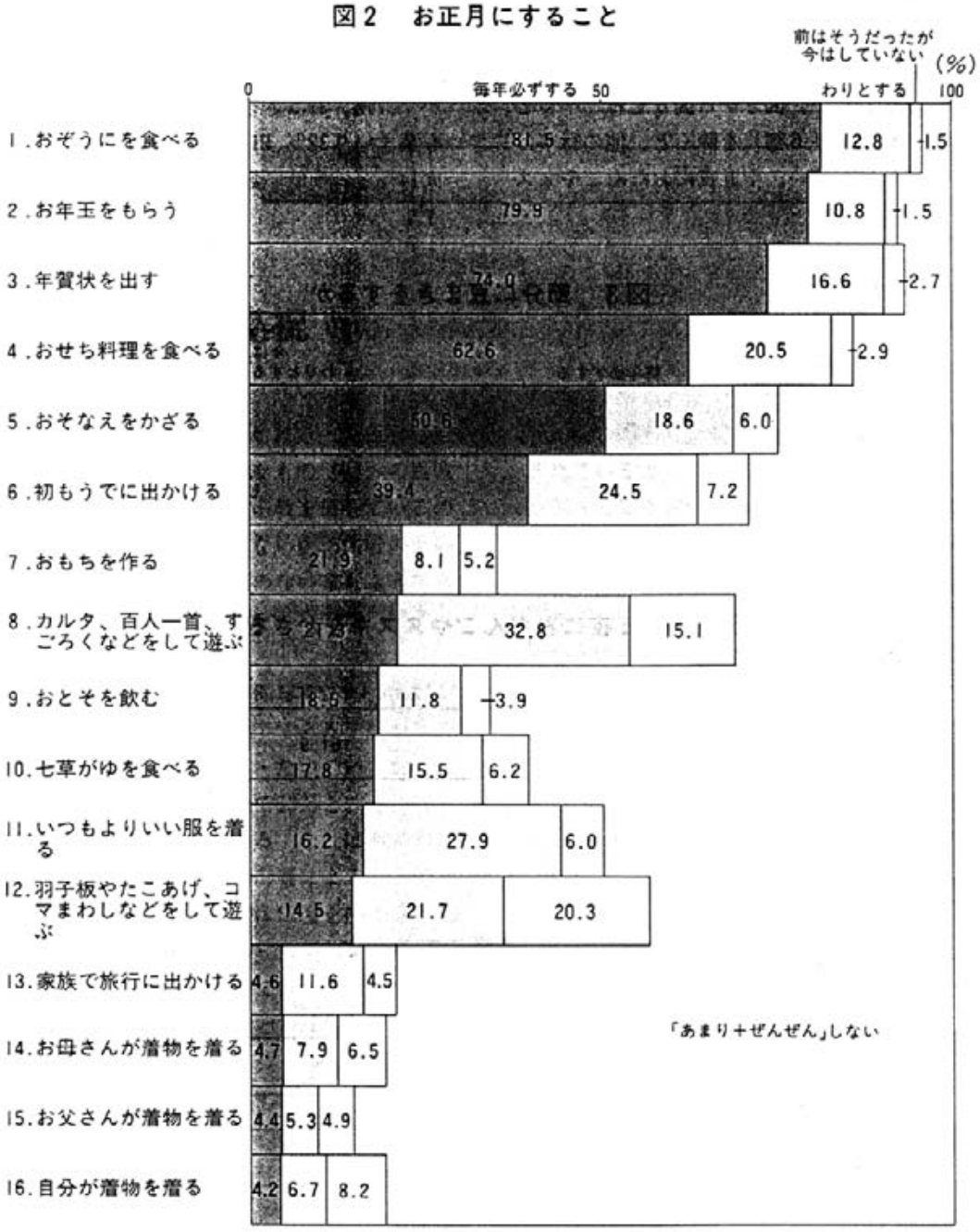
お正月

図2は、お正月に家族や自分が、どんなことをするかを尋ねたものである。「おぞうにを食べる」「お年玉をもらう」「年賀状を出す」の「毎年必ずする」割合が7割以上と高く、以下、「おせち料理を食べる」(約6割)、「おそなえをかざる」(約5割)、「初もうでに出かける」(約4割)と、かなりの健闘ぶりで、お正月はまだ十分にその姿や雰囲気を残している行事であることがわかる。

しかし変わったのはそこで遊ばれる遊びで、かつてお正月の子どもの遊びの代表であった「羽子板やたこあげ、コマまわし」などの遊びを「毎年必ずする」子は、15%ほどと低く、「カルタ、百人一首、すごろく」などの室内

遊びにしても20%強がしているにすぎない。都市化の波に、たこあげさえできる場所が少なくなってきたのだろうか。それとも「技術」を必要とする遊びが子どもたちの手に負えなくなってしまったのか。いずれにせよ、お正月の風物詩ともいえる、子どもたちの遊びが見られなくなっていくことは、なんともさびしいものである。

図2　お正月にすること



しかしおとなも同様で、この日、着物を着る習慣のある家庭も5％に達しない。いずれにせよ、めんどうなことは次々と生活の中から姿を消してゆくのかもしれない。

節分、お彼岸、お盆、十五夜

季節感や宗教色のこめられたこれらの行事はどうなったか。図3から図6をみてゆくと、節分の豆まき（6割）を除くと、他の行事はまことに影が薄い。十五夜におだんごやススキを「必ず」備える家は13％、お彼岸の墓まいり27％、おはぎを作る16％、またお盆行事も墓まいり32％、田舎の家に集まる25％、迎え火14％という低い数字となっている。

図3　節分に豆まきをするか

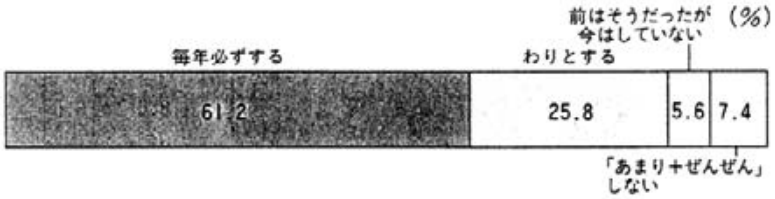


図4　十五夜におだんごやススキをかざるか

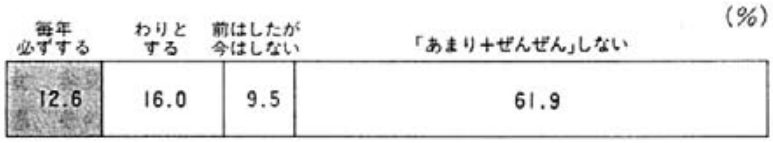


図5　お彼岸にすること

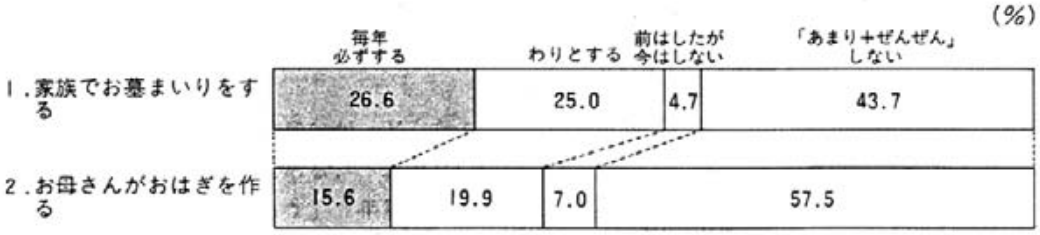
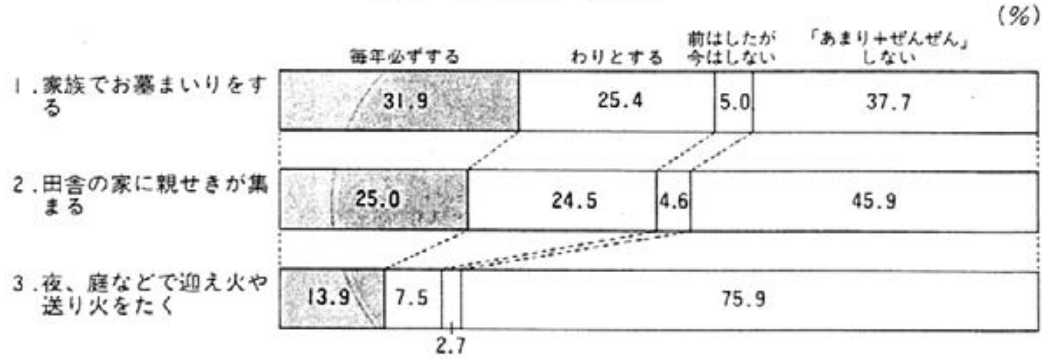


図6　お盆にすること



神仏と慶祝

日本人は無宗教だと言われる。先祖をうやまったり(仏)、超自然的なもの(神)への畏敬の念はあっても、それは宗教を信じているのとは、かなり違うのではないか。住居のわい小化の中で、仏壇や神棚のない家もふえてきているとされる。この点をみたのが、図7、図8である。

これらによると神棚の保有率26%、仏壇が35%。思った通り低い数字である。しかしそれらの家の子で、「毎日・たいてい」おがむ子は、神棚で39%、仏壇で53%と、それほど低くない割合を示している。これは親の割合が59%と72%で、両親の影響によるものであろう。しかし全体の中では仏壇を持つ家が35%、その中で「毎日・たいてい」おがむ子が53%であるから、全体の中で毎日(に近く)仏壇をおがむ子はわずか19%となってしまう。

しかし神棚や仏壇のある家では、手入れはされているようで、だいたい(必ず)さかきのかざってある家は(所有者の)67%、仏壇に仏花がかざってある家は85%という高い数値である。

またついでに、物日に日の丸とお赤飯をたくなどの習慣をみたのが図9である。まず日の丸を立てる習慣が全くない家は84%。これについてのコメントはしないほうが無難だろう。またお赤飯をお祝いの日にたく習慣も、「わりとたく」を合わせて4割である。またお墓まいりを全くしない家も1割あり、「あまりしない」を加えると、4割の家にはお墓まいりの習慣がない。もっともこれは、お墓の場所の問題かもしれない。それにしても、日本人の特徴であった祖先信仰もかなり薄れてきていると言えそうである。

図7　家に神棚があるか

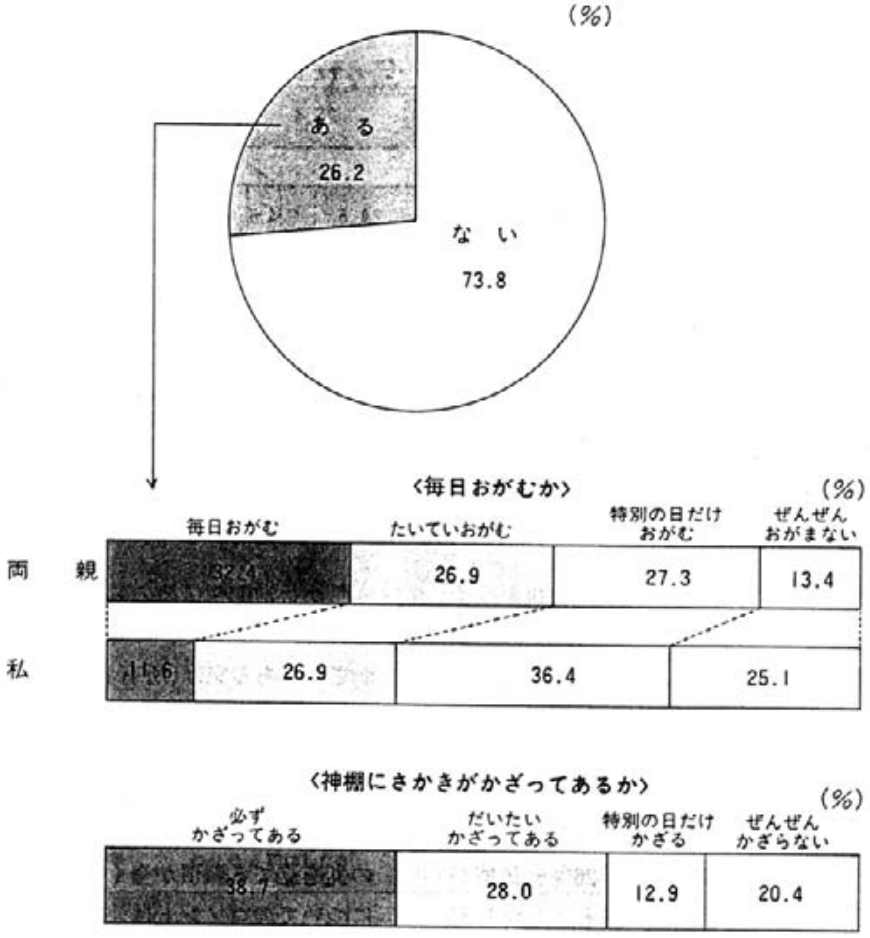

(%)
ある
26.2
ない
73.8
〈毎日おがむか〉
(%)
毎日おがむ
たいていおがむ
特別の日だけおがむ
ぜんぜんおがまない
両　親
26.9
27.3
13.4
私
26.9
36.4
25.1
〈神棚にさかきがかざってあるか〉
(%)
必ずかざってある
だいたいかざってある
特別の日だけかざる
ぜんぜんかざらない
28.0
12.9
20.4

図8　家に仏壇があるか

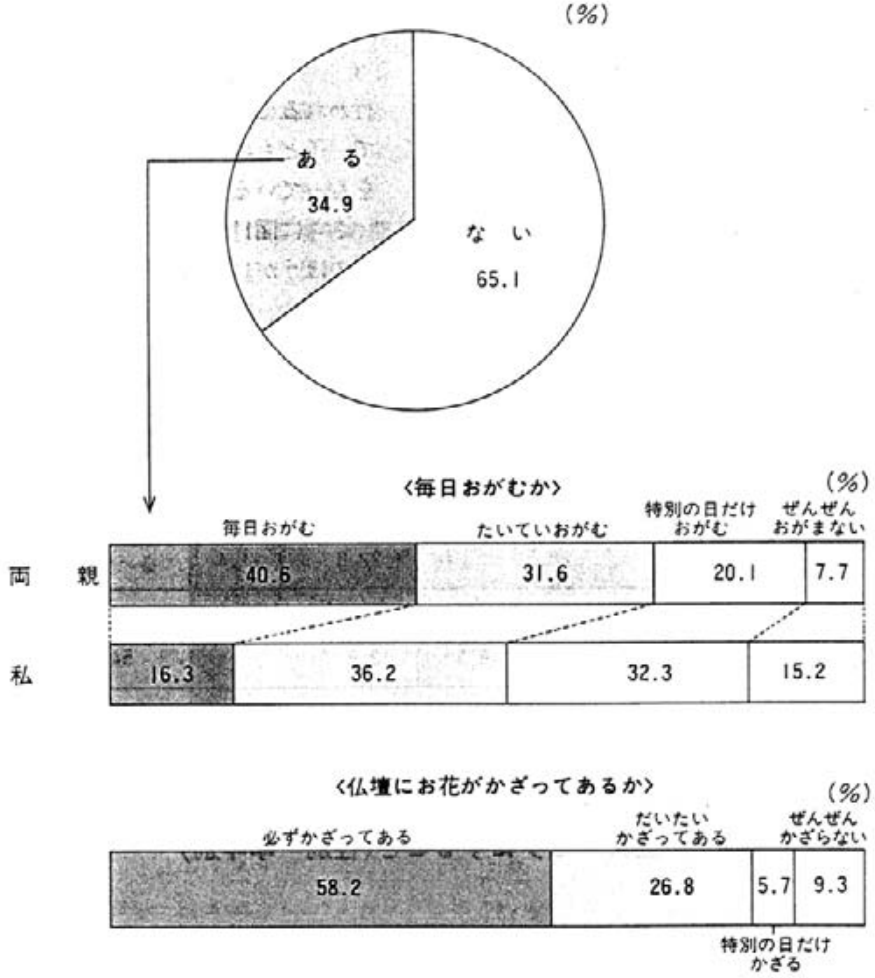
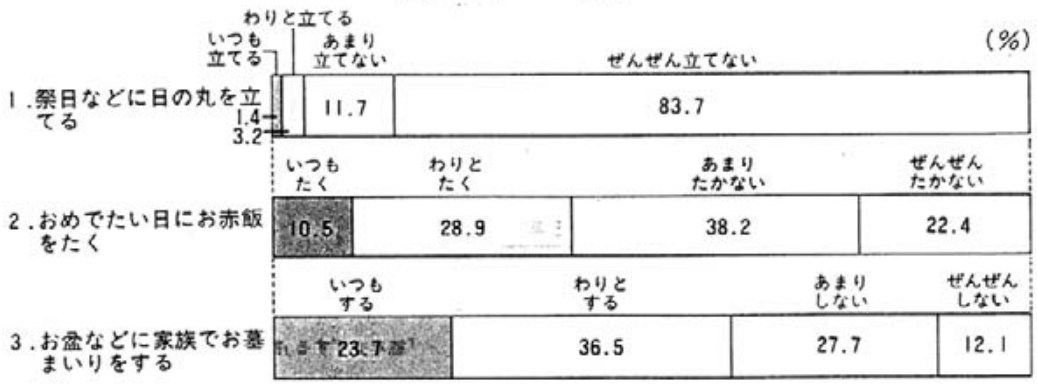


図9　家での習慣



七夕、ひなまつり、子どもの日

次に七夕の日、「家に竹を立てる」家庭は、「わりとする」までを含めて3割強。「たんざくに願いごとを書く」子どもは、5割程度である(図10)。竹やささの葉などは、都会では手に入りにくくなってきたので当然の結果かもしれない。そういう意味では、小学校で行われる七夕集会などは、季節的な行事として、子どもの暮らしの中で意外に大きな意義をもっているのかもしれない。

さらに図11をみると、どちらの項目も、女子のほうが(女子のいる家庭で)、している割合が高く、学年が上がると、しなくなってい

図10　七夕にすること

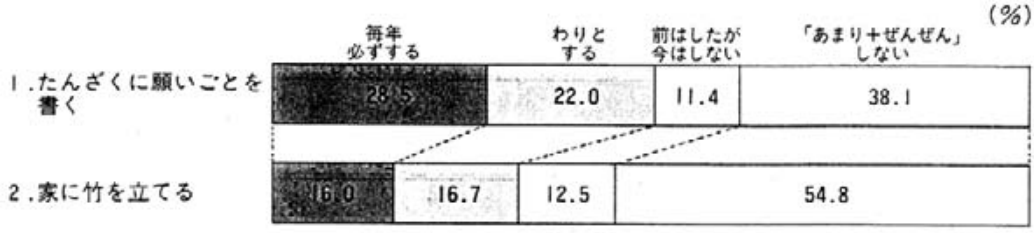
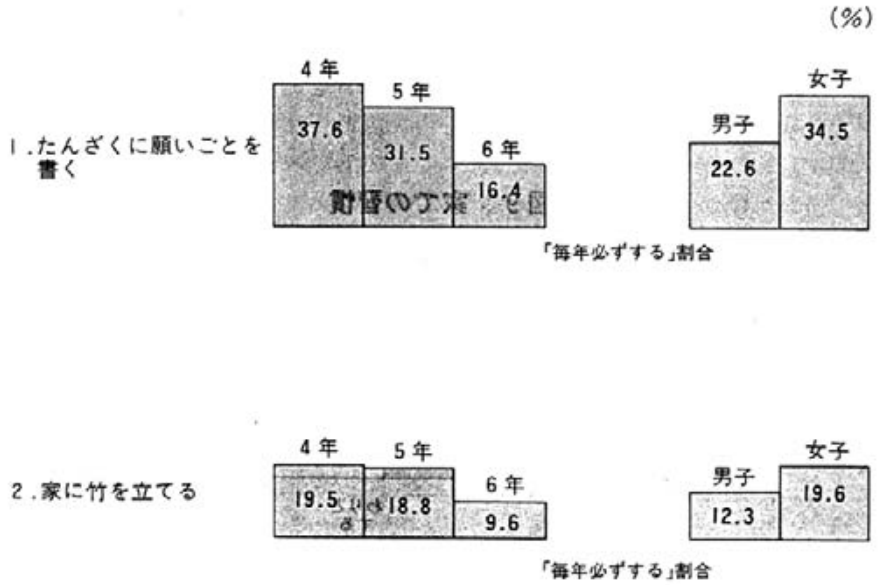


図11　七夕にすること(性別・学年別)



く様子が読みとれる。

次に、桃の節句・ひなまつりについてみてゆこう。図12が示すように、「ひなあられを食べる」(8割)や「ひな人形をかざる」(6割)割合が高く、女の子のお祝いのせいか、女子の「毎年必ずする」割合が圧倒的に高いことがわかる(図13)。しかし、お祝いのパーティなどは、ほとんどしていないようである。

では、男の子のお祝いの日である端午の節句・子どもの日はどうであろう。「かしわもちを食べる」(63%)、「かぶとをかざる」(37%)、「こいのぼりを立てる」(22%)となっており、あまり高い数値ではない(図14)。

最近の土地や住宅事情から考えても、大きなこいのぼりを立てる家は限られてしまい、一部の農家で、そのような光景を見るくらいである。さらに巻末の集計表によって性別・学年別で「毎年必ずする」割合を比較してみると、どの項目も男子が女子を上回っており、「かぶと」や「こいのぼり」の項目では、学年が上がるにしたがい、する割合が減っていくことがわかる。

図12　ひなまつりにすること

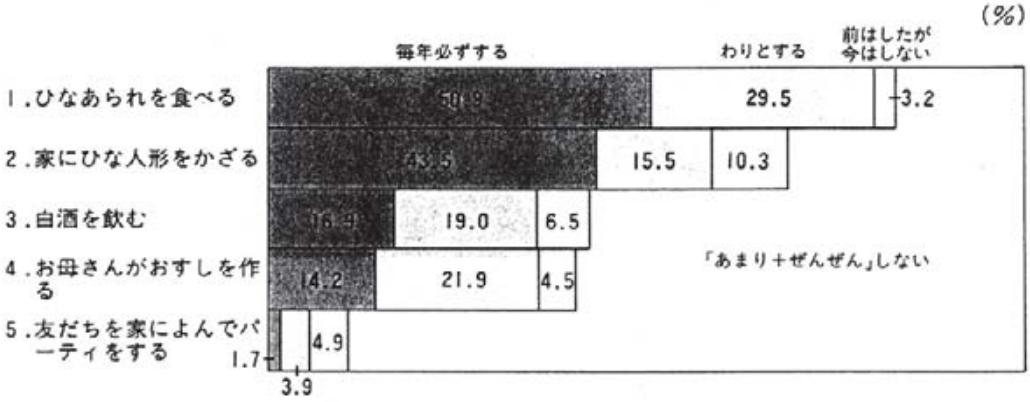


図13　ひなまつりにすること(性別)

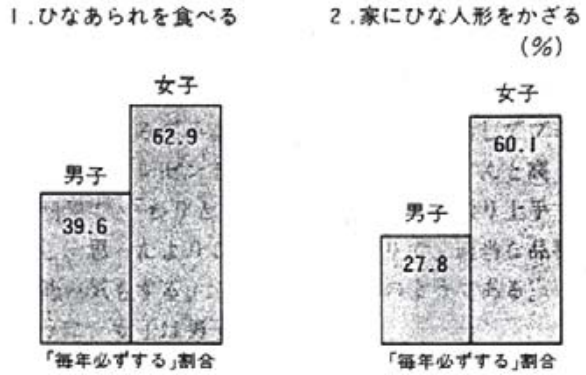
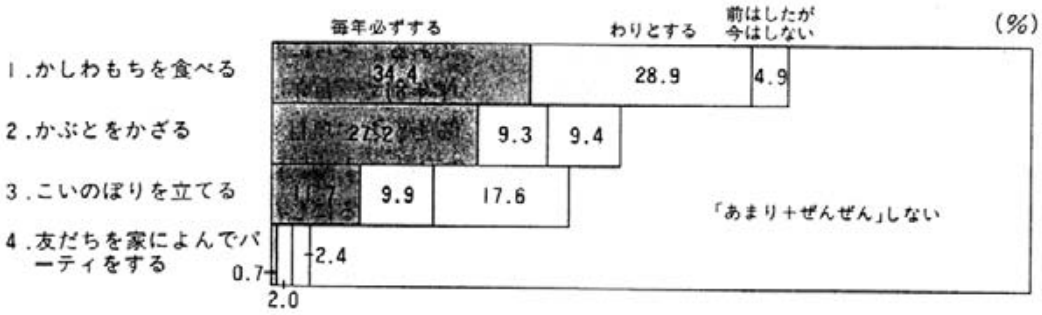


図14　子どもの日にすること



3. 外国から来た行事をめぐって

日本の伝統的な行事が、次第に家の中から姿を消している様子をみてきた。しかし戦後外国から新しい行事がいくつか入ってきて、中には戦後大流行したクリスマスのように、一時は国民的行事と化したような行事もあり、最近ではバレンタインデーのように、かなり遊び的要素を含んだ行事もある。こうした新しい西欧的な行事はどうだろう。

母の日、父の日

まず母の日と父の日についてみてみよう。図15によれば、母の日に必ずプレゼントを贈る習慣のある子は、3割弱で、「わりとする」を合わせても5割と少し。思ったよりこの日は子どもへの定着率が低い気もする。

また、図16が示すように、女子は男子よりも父母に対してプレゼントや花をきちんと贈る割合がぐんと高くなっている。

女子は贈り上手であるが、男子はもらうばかりで、適当な品物をみつけて贈るなどは苦手のようである。

図15　母の日、父の日にすること

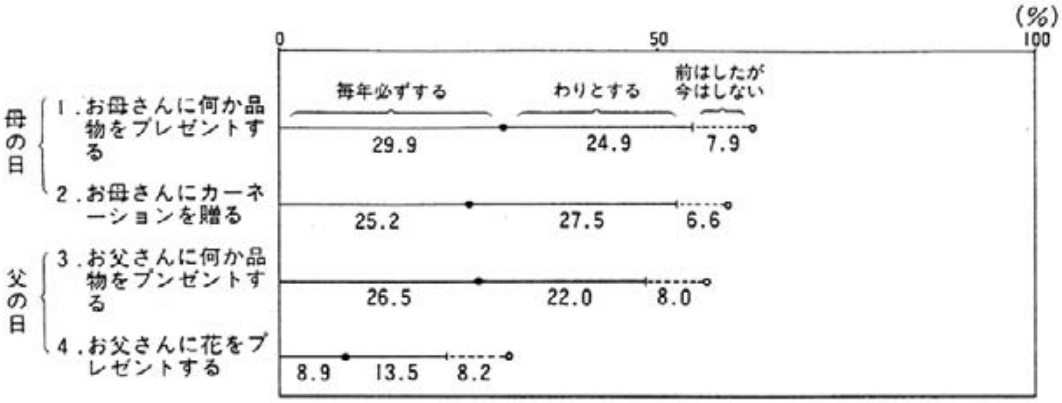
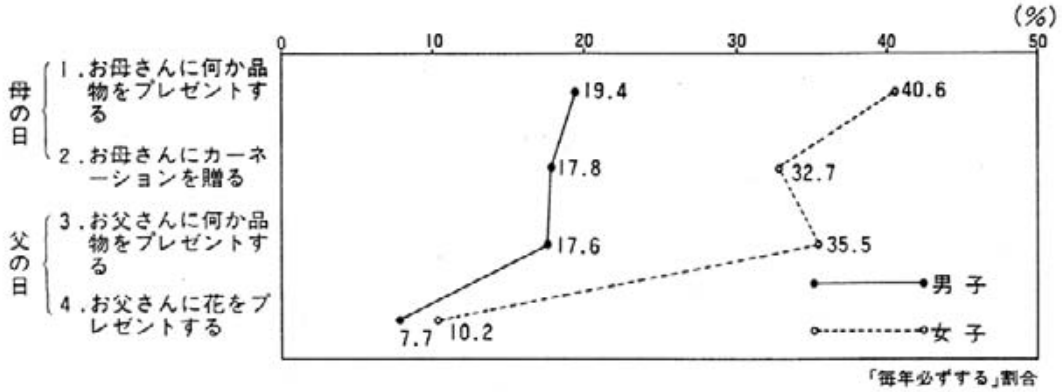


図16　母の日、父の日にすること(性別)



クリスマス

おとなの間ではひと頃の国民的行事の勢いを失ってしまったクリスマスだが、子どもたちにとってはどうだろうか。**図17**をみると、「毎年必ずする」割合は、「ケーキを食べる」77%、「親からクリスマスプレゼントをもらう」68%、「クリスマスツリーをかざる」47%と、子どもの日以上に子どもにとってのビッグイベントとなっていることがわかる。しかし、カードを贈ったり、よい服を着たりといった心のこめ方はないし、むろんくつ下をつるす風習も入ってきていない。パーティも3割しか開いていない。いかにも日本人的器用さで、ケーキとプレゼントとクリスマスツリーだけをとり入れ、あたかも子どもの日として楽しんでいるかのようである。

また**表2**によると、これも女子のほうがこまめにやっており、かつ学年が上がると少しずつ実行率がへっている。

また、クリスマスといえば、サンタクロースが頭に浮かぶ。たいていのおとなは、その昔サンタクロースのプレゼントを信じてくつ下をつるし、寝入った子ども時代をもっているが、では現代の子どもたちは、どうであろう。**表3**によれば、サンタクロースを信じていた年齢は、5～7歳くらいまでに多く、小学校に入った頃が、子ども時代との別れ（サンタクロースの死んだ日）のようである。

図17　クリスマスにすること

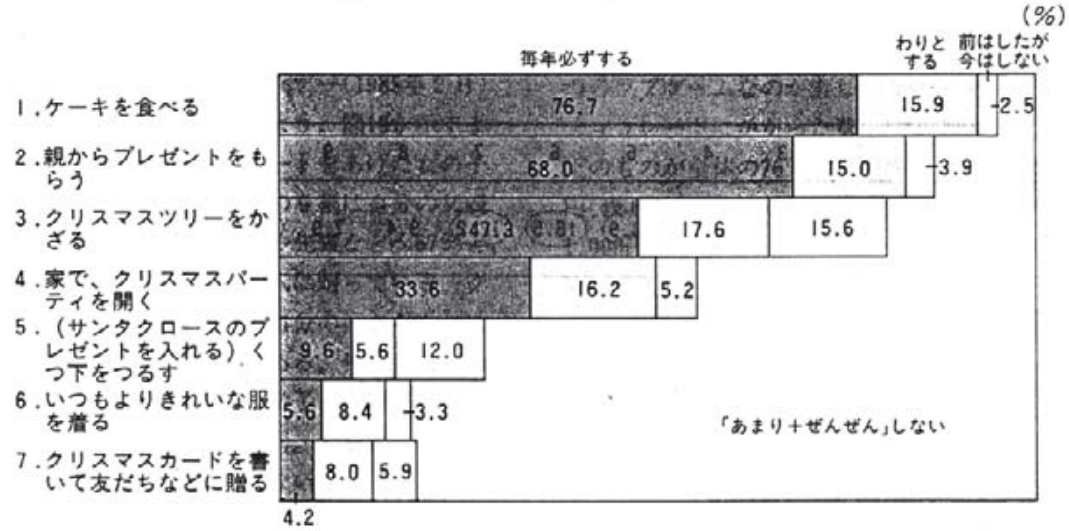


表2　クリスマスにすること

(%)

	全体	男子		女子	4年		5年		6年
1.ケーキを食べる	76.7	73.6	<	79.8	75.7	<	79.5	>	74.7
2.親からプレゼントをもらう	68.0	65.6	<	70.5	69.1	<	69.9	>	65.1
3.クリスマスツリーをかざる	47.3	42.3	<	52.4	53.5	>	51.0	>	37.4
4.家で、クリスマスパーティを開く	33.6	29.0	<	38.3	37.4	>	33.0	>	30.4
5.(サンタクロースのプレゼントを入れる)くつ下をつるす	9.6	8.3	<	10.8	12.6	>	8.3	>	7.8
6.いつもよりきれいな服を着る	5.6	3.9	<	7.3	6.7	>	6.5	>	3.6
7.クリスマスカードを書いて友だちなどに贈る	4.2	2.7	<	5.8	5.7	>	3.4	<	3.6

「毎年必ずする」割合

表3　サンタクロースを信じていた年齢

年齢(歳)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
割合(%)	1.1	1.2	7.8	9.5	18.9	16.5	12.2	9.4	7.9	10.3	2.7	2.5	6.87歳

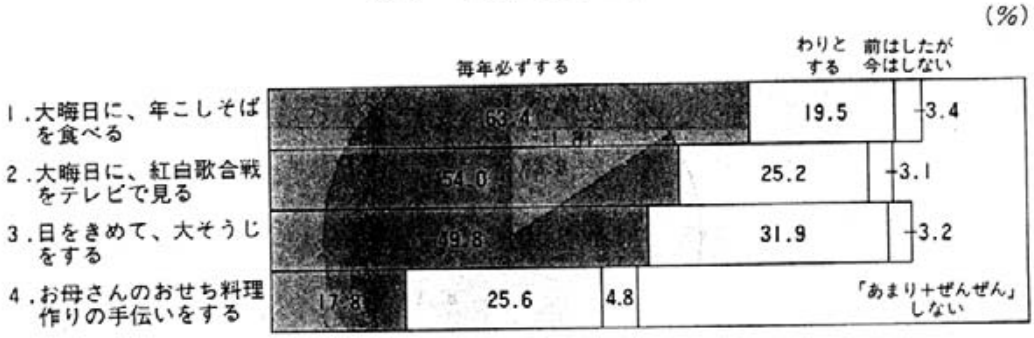
◯印は10%以上のもの

大晦日

輸入行事ではないが、クリスマスが登場したついでに、年末の様子をみてみよう。

図18が示すように、大そうじをすませ、紅白歌合戦をテレビで見て、年こしそばを食べる恒例の行事は、今でも継続されている様子がうかがえよう。しかし、おせち料理作りの手伝いを「毎年必ずする」子はわずかに18%で、昔のように準備の過程から参加してもり上げていくといったイベントではなくなったようである。

図18　年末にすること



バレンタインデー

バレンタインデーは、チョコレートメーカーの企みが成功して、今やクリスマスに代わる国民的行事になってしまったかのようである。中高生とは違うメカニズムとはいえ、しかし全く異質でもないこのラブゲームは、小学生にとってもかなりの人気がある。

では前回のバレンタインデー(1988年2月)についての回答をみてみよう。図19が示すように、男の人へチョコレートをあげた女の子は、全体の84%、その中の9割は自分の父親が対象で、他にも、兄弟や先輩などへ67%と、比較的渡しやすい身近な人に贈っている。クラスの男の子へは35%、自分の好きな人へは3割弱とまだひかえめである。男の担任へは、約3分の1にあたる23%の子があげており、思ったほどではない(表4)。事前に、学校へチョコレートを持ってこないように、または、お返しが大変になるので「いらない」と断った教師もいると聞くので、このような数値に落ち着いたとも考えられる。また、学年別にみると、6年の女子は、担任もしくは他の男の先生へチョコレートを贈る割合がぐんと増え、意識の対象が身内から年上の男性へ向けられてくる。

次に女の子たちが、どのくらいの数のチョコレートを贈り、全部でいくらくらいになったのかを探ってみよう。表5をみると、あげたチョコレートの数は2～3個が主流で、全体の平均は3.9個。6年の女子では平均4.3個で、10個以上あげた子も9%近くもいる。思春期の女の子にとっては、義理チョコもひとつのラブゲームなのかもしれない。さらに、チョコレートにかかった費用は、1,000円以下のものが全体の76%で、平均の金額は935円(表6)。6年の女子では金額がはね上がり、1,000円以上も使う子が40%。平均が1,200円近くにもなっている。

では、男の子の場合はどうか。図20が示すように、女の子からチョコレートをもらった男の子は全体の51%で、半分はもらえない日を経験していることになる。しかも学年が上がるにしたがって、もらえる子の割合が減っており、特定の男の子にチョコレートが集中していく傾向が読みとれる。

もらった男の子についてみると、平均は3.9個。学年差はまだみられない(表7)。となると、バレンタインデーは半分の男の子にとってだけのお祭りで、先にみたデータの中でのバレンタインデーの不人気も、案外こんなところから来ているのかもしれない。

図19　バレンタインデーにチョコレートをあげたか(女子)

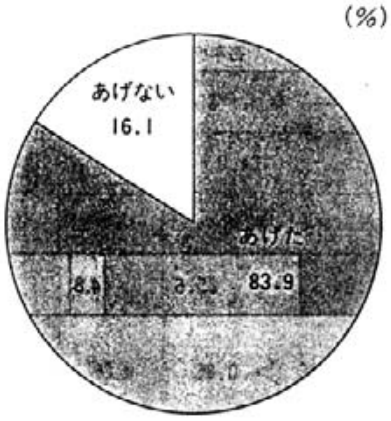


表4　チョコレートをあげた人(学年別)

(%)

あげた人	全体	4年女子	5年女子	6年女子
1.お父さん	90.7	89.9	93.4	89.0
2.担任の男の先生	22.6 (女の先生は35.3%いた)	19.4	15.7	31.9
3.他の男の先生	6.7	4.0	5.6	10.4
4.クラスの男の友だち	34.7	32.3	32.0	39.6
5.自分の好きな人	28.9	26.0	30.7	29.9
6.先輩、兄弟、近所の子など	67.3	70.5	65.1	66.2

◯印はその項目の最大値

表5　あげたチョコレートの数

(%)

あげた個数	全　体	4年女子	5年女子	6年女子
1　個	13.7	13.9	18.4	8.1
2　個	22.8	25.5	21.3	21.7
3　個	20.7	16.1	24.3	21.7
4　個	11.5	11.7	8.1	14.7
5　個	12.7	16.8	10.3	11.2
6　個	6.7	5.1	6.6	8.4
7　個	3.6	2.9	5.1	2.8
8　個	1.7	1.5	1.5	2.1
9　個	0.5	0.7	0.0	0.7
10　個	2.9	2.9	2.9	2.8
11個以上	3.2	2.9	1.5	5.8
平均個数	3.91個	3.88個	3.54個	4.28個

◯印は20%以上のもの

表6　チョコレートにかかった金額の合計

(%)

全額の範囲	全　体	4年女子	5年女子	6年女子
1～500円	38.9	45.3	43.7	27.5
501～1,000円	36.6	36.7	40.4	32.1
1,001～1,500円	10.0	4.0	8.4	17.6
1,501～2,000円	10.9	11.8	6.7	13.8
2,001円以上	3.6	2.2	0.8	9.0
平均金額	935円	820円	797円	1,174円

◯印はその項目の最大値

図20　バレンタインデーにチョコレートをもらったか(男子)

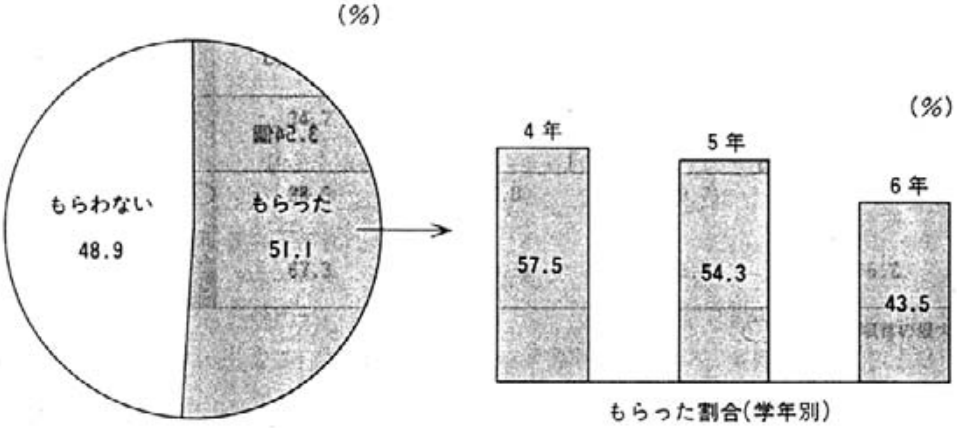


表7　チョコレートをもらった個数

(%)

もらった個数	全　体	4年男子	5年男子	6年男子
1　個	18.9	18.3	20.2	17.9
2　個	19.3	23.9	18.1	16.7
3　個	19.3	16.9	13.8	28.2
4　個	11.1	12.7	13.8	6.4
5　個	12.8	14.1	10.6	14.1
6　個	6.2	5.6	8.5	3.8
7　個	3.3	1.4	4.3	3.8
8　個	2.5	0.0	4.3	2.6
9　個	1.6	1.4	2.1	1.3
10　個	1.6	2.8	2.1	0.0
11個以上	3.4	2.9	2.2	5.2
平均個数	3.86個	3.69個	3.94個	3.92個

◯印は20%以上のもの

4. 誕生日をめぐって

誕生日プレゼント

先にみたように、数ある行事の中で「誕生日」は、今の子どもにとってもベスト5に入る楽しみの日であるらしい。この輝かしい日を、もう少していねいに探ってみることにしよう。

まず、**図21**では「誕生日がきて、ひとつ年をとることがうれしいか」を尋ねた。全体の63%がうれしいと答えており、男女差はあまりみられない。だが学年が上がるにつれ、「とてもうれしい」割合が減って、おとなと同じような傾向を示している。

また、誕生日が来て一番うれしいのは、プレゼントであろう。しかし**表8**によれば、バースデーカードをもらう子は約35%で、もらっても平均1.7枚と、1～2枚程度でしかない。もらうのは女子が多く、男子の83%はもらっていない。また6年生でも、全体の75%がもらわないと答えている。

しかしプレゼントは、どの子ももらっている。もらった子の中で平均すると、家族から2.0個、祖父母のような親せきから2.2個、そして友だちからは、誕生会の影響もあろうが5.7個ももらっている計算になる(**表9**)。単純に計算すると、誕生日の子どものもとへ1人平均10個近くのプレゼントが贈られる計算になる。豊かな時代に育っていることが、あらためて考えさせられる結果である。しかもプレゼントは、手作りのものより、買ってきたものが好まれる傾向にあり(**図22**)、ココロよりモノが先行する時代であることを思わさせられる。

さらに表は省略したが、もらったプレゼン

トの個数を性別・学年別で比較すると、とくに友だちからのプレゼントの個数が学年が上がるごとに少なくなり、6年では、女の子のほうが低い数値を示している。誕生会の影響もあろうが、6年女子の交際範囲が特別に小さくなっていく姿も読みとれる。

また、プレゼントの代わりに金銭を贈る傾向も強く、その場合は家族（両親）から平均で5,222円、親せきからは4,766円ももらっており、小学校の高学年ともなれば5,000円が相場ということになろう(表10)。しかも図23が示すように、学年が上がるにつれその金額は増え、6年の男子では8,000円近くにもなることがわかる。平均すると、女子よりも男子のほうがかなり多くもらっていることが読みとれる。

図21　誕生日がきて、ひとつ年をとることがうれしいか

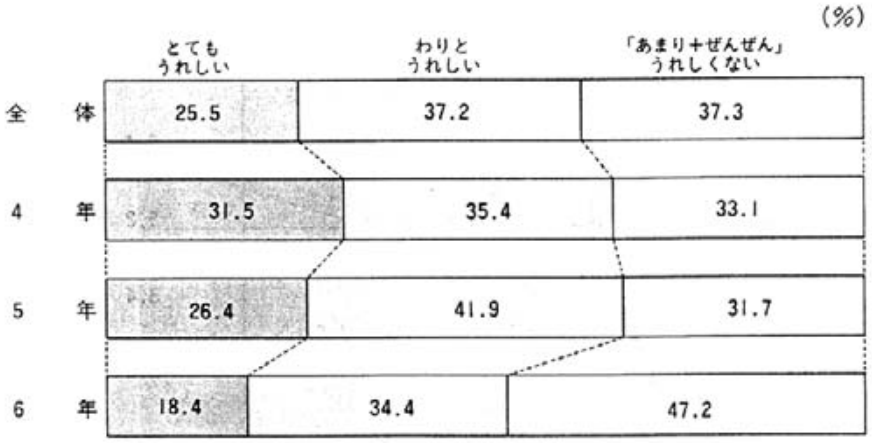


表8　バースデーカードをもらった割合

(%)

もらった枚数	全体	男子	女子	4年	5年	6年
0枚	65.7	83.1	47.9	55.8	66.5	75.0
1枚	6.6	16.9	52.1	44.2	33.5	25.0
2枚	6.9					
3枚	6.3					
4枚	2.9					
5枚	5.0					
6枚以上	6.6					
平均枚数	1.65枚	1.01枚	2.31枚	1.96枚	1.88枚	1.10枚

表9　プレゼントの数

(%)

もらった人 / 個数	家族から	親せきから	友だちから
1　個	47.6	44.8	18.0
2　個	26.1	30.4	12.9
3　個	14.9	12.5	11.2
4　個	5.5	3.2	8.4
5　個	3.7	4.5	11.8
6　個	2.2	4.6	6.4
7　個			5.2
8　個			3.4
9　個			2.2
10　個			8.8
11個以上			11.7
平均個数	2.03個	2.15個	5.70個

図22　プレゼントの内容の好き嫌い

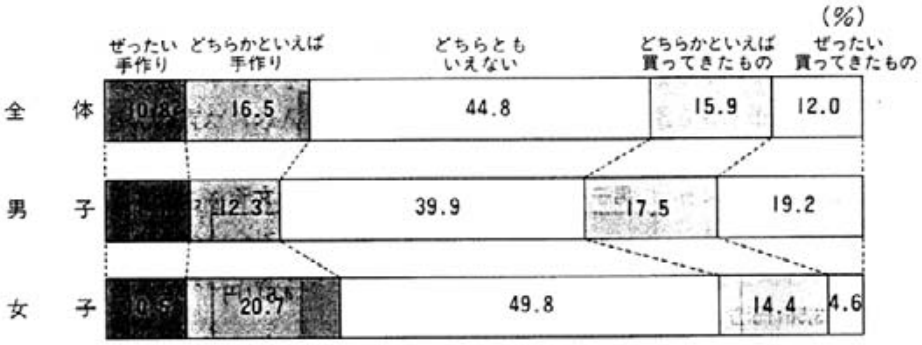
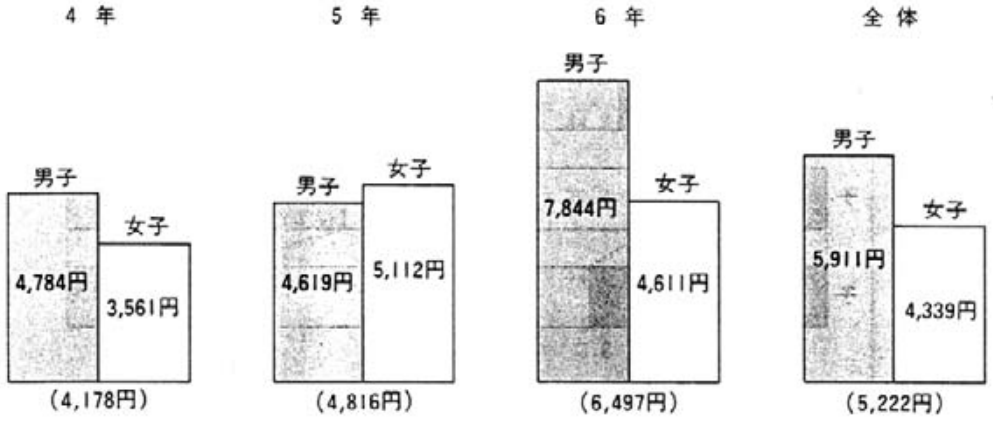


表10　もらったお金の額

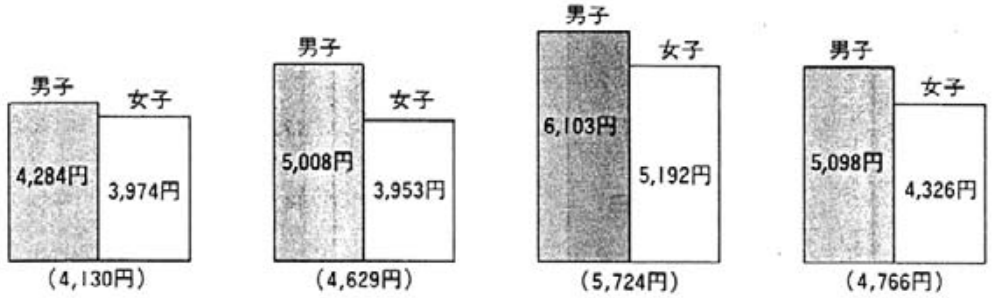
(%)

金額 ＼ もらった人	家族から	親せきから
1～1,000円	26.6	23.6
1,001～2,000円	12.2	17.4
2,001～3,000円	12.4	14.0
3,001～4,000円	2.3	0.3
4,001～5,000円	24.5	23.2
5,001～10,000円	15.2	16.2
10,001円以上	6.8	5.3
平均金額	5,222円	4,766円

図23　①家族からもらうお金の合計の平均金額



②親せきからもらうお金の合計の平均金額



自分の誕生会

小学生にとって誕生日のプレゼント以上にうれしいのが、誕生会かもしれない。友だち同士で呼んだり、呼ばれたりするうちに、つき合いも深まり伸よくなってゆく。加えて、親同士も一層親しさを増してゆくのではなかろうか。

とくに小学校低学年の頃は、たくさんの友だちを呼びあう、華やかな誕生会が繰り広げられるが、しかし高学年ともなれば規模も内容も縮小化していく傾向がみられる。とはいえ、学校では校外での誕生会に対してとくに規制をする感じはない(図24)。かといってクラスで特別に誕生会をして祝ってあげるわけでもないようだ(図25)。

そこで、ここでは4年生～6年生の間で、一般的に、どのような誕生会が行われているのかを探ってみよう。

まず図26が示すように、友だちを呼んで誕生会をした子は全体の28%。女子のする率が高いものの、6年生になると13%しか誕生会をしていないことがわかる。しかし、自分の誕生会は楽しいらしく「まあ楽しかった」ま

でを含めると94%の子が楽しいと答えている(図27)。また、「とても楽しかった」割合は女子が高く、学年が上がるにしたがって、楽しさも減少していく傾向にある。

では、実際の誕生会の中身はどうなっているのであろう。呼んだ友だちの人数をみてみると(表11)、4～8人程度が平均的だが、しかし、10人以上の友だちを呼んだ子も、全体の35%もいる。そのためか全体の平均人数は7.3人と、かなり多い人数を誕生会に招待していることがわかる。

そしてその内訳は、同性同士(図28)、同学年同士(図29)がほとんどで、クラスの友人を中心に誕生会が催されていることがわかる。そこでもらうプレゼントの数は、平均で8.3個と8個以上にものぼり(表12)、どの学年も女子のもらう数が多いことがわかる(図30)。また、10個以上もらう子も全体の38%以上いる。

ではそのプレゼントは、だいたいいくらくらいの額のものであったのだろう。表13をみると1,000円以下と答えた者が9割以上もおり、小学生の誕生会としては非常に適切な金額に親が押さえている様子がうかがえる。そして、

図24　誕生会への学校の対応

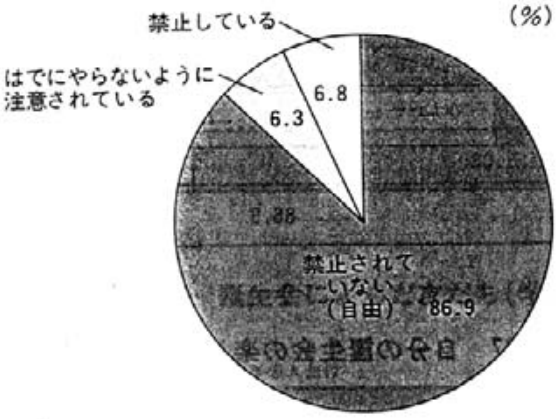
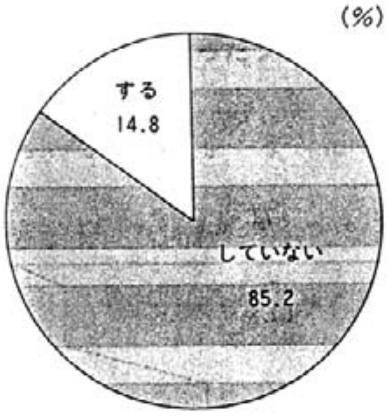


図25　クラスで誕生会をする割合



平均の金額は765円という結果であった。

そうした誕生会を開くにつき、友だちを呼んだ家では、来てくれた子どもたちにお礼やお返しの意味をこめて、記念品やおみやげを8割が渡しており(図31)、これも誕生会のひとつの習慣になっているようである。

図26　友だちをよんで誕生会をした割合

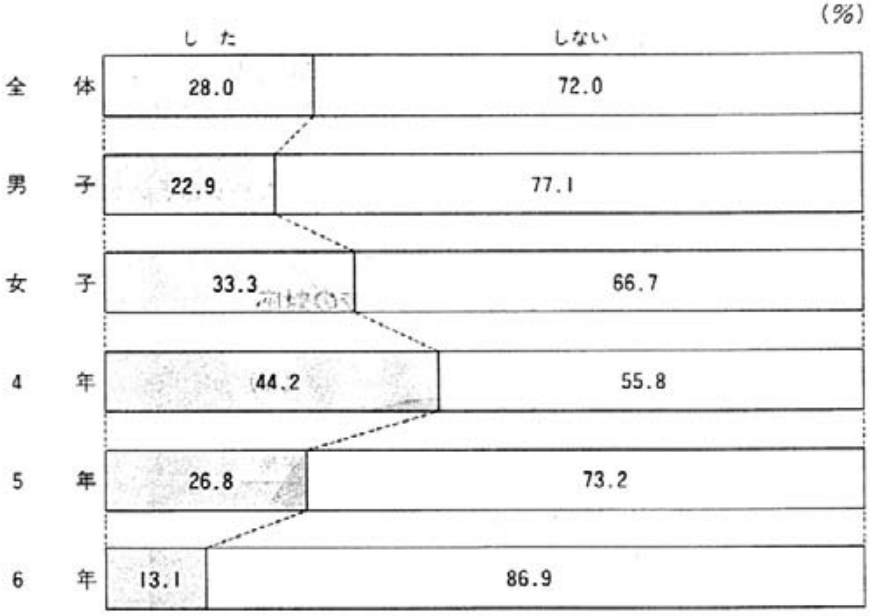


図27　自分の誕生会の楽しさ

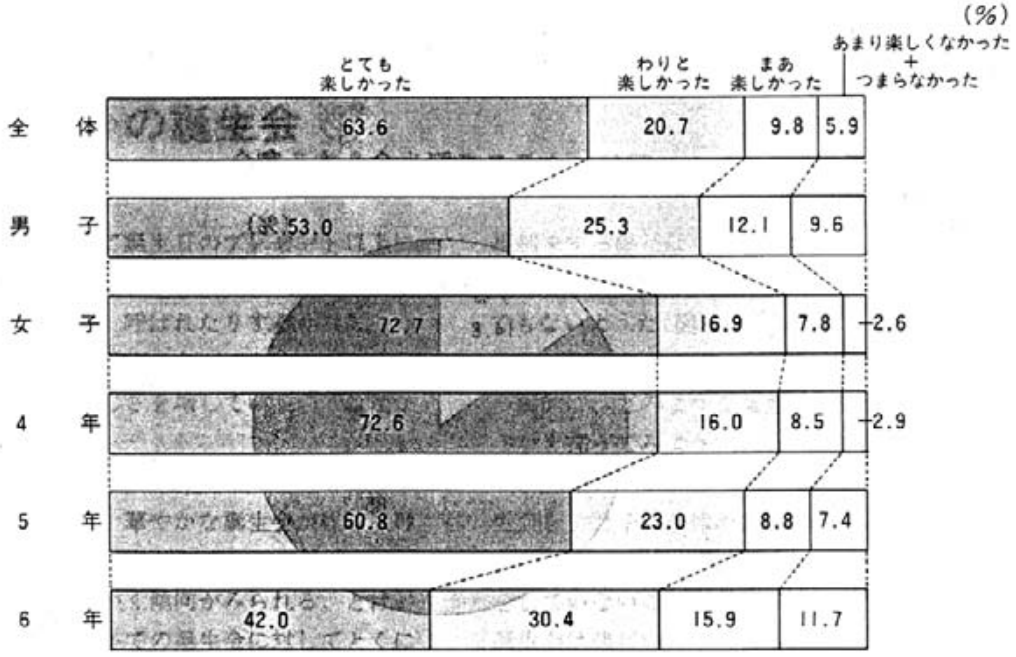


表11　誕生会によんだ友だちの数

人　数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11以上
割合(%)	2.9	3.1	5.2	7.6	14.5	10.5	7.9	9.8	3.8	12.1	22.6

（平均7.28人）

図28　誕生会によんだ友だち(性別)

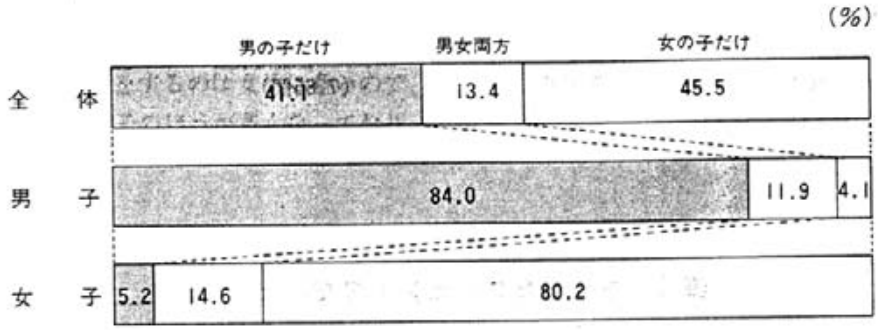


図29　誕生会によんだ友だち(学年差)

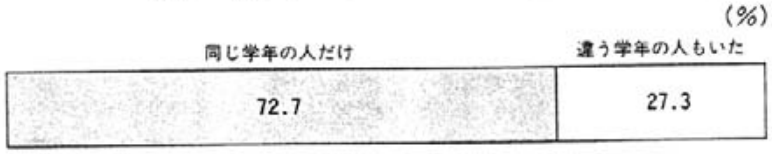


表12　誕生会でもらったプレゼントの数

個　数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16以上
割　合(%)	3.5	4.2	5.7	6.2	13.6	8.9	8.9	6.0	4.7	13.6	5.2	4.7	2.7	3.0	3.5	5.6

（平均8.34個）

図30　誕生会でもらったプレゼントの数(性別・学年別の平均)

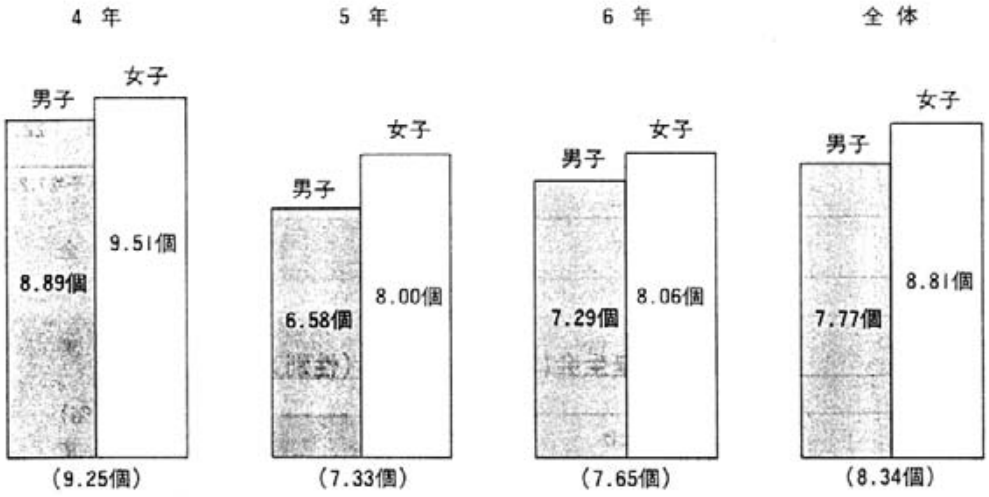
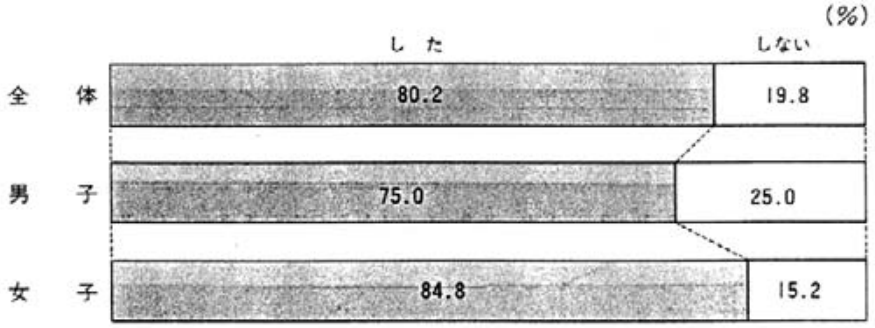


表13　もらったプレゼントのだいたいの額

金額の範囲	1～500円	501～1,000円	1,001～2,000円	2,001～3,000円	3,001円以上
割 合 (%)	54.4	38.9	2.4	0.8	3.5

(平均 765円)

図31　誕生会に記念品を渡すか



友だちの誕生会

これまでは、自分の誕生会についてみてきた。しかし、友だちの誕生会に呼ばれることも多いはずである。しかも、そうした誕生会に呼んでもらうことは、子どもたちにとってひとつの特権を得ることであり、自分がその友人から特別に仲よしであると認めてもらったことの証明でもある。

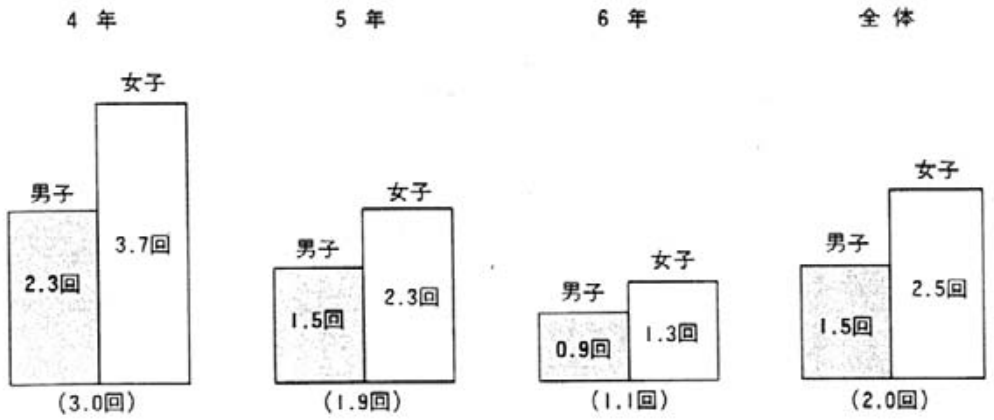
さて、**表14**が示すように、この1年間で誕生会に呼ばれた回数の平均は2回。しかし、1回も呼ばれない子も3分の1以上いることがわかる。誕生会をするのは女子に多いので、呼ばれる回数も女子のほうが多くなっており(**図32**)、4年生の女子では、平均4回近くも呼ばれていて、自分の誕生会を含めれば、1年間に5回前後の誕生会を経験することになる。

また当然のことであるが、誕生会に呼ばれることは「少しうれしい」までを含めて、9割の子がうれしいと答えている。しかし、その「うれしさ」は、ここでもまた女子のほうが大きく、学年が上がると減少していく。4年、5年では、「とてもうれしい」と答えた子が5割以上もいるのに、6年になると2割強まで減ってしまう(**図33**)。おそらく6年生

表14　1年間で誕生会によばれた回数

回数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10以上	平均
割合(%)	34.6	18.1	15.5	12.7	5.6	5.6	2.1	1.4	1.1	0.8	2.5	2.0回

図32　1年間で誕生会によばれた平均回数(性別・学年別)



にもなると、誕生会はそう魅力的なものではなくなってしまうのであろう。

だが誕生会に呼ばれれば、誕生カードやプレゼントを持っていくのは当然であろう。**図34**からカードを持っていく子は「ときどき」までを含めて約5割。ほとんどは、女子がしているにすぎない。でもプレゼントは、男女どの子も持っていくと答えている(**図35**)。

またプレゼントは、手作りのものより買ってきたものがほとんどで(**図36**)、金額は1,000円以下のものに押さえており、平均で747円となっている(**表15**)。表は省略したが、学年が上がると、持っていくプレゼントの額も上がっていく。

最後に、プレゼントを買うお金の出どころを調べてみよう。**図37**が示す通り、「お母さんからもらう」割合が43%と一番多く、次いで「自分のこづかいから」が31%。6年生になると、「自分のこづかいから」買う子が一番多く、4割近くにもなる。見方によれば、友だちのために自分のお金を使うわけであるから、子どもの自立や成長の面から考えると、よい傾向であるとも言えそうだ。

また最近の誕生会の傾向は、あまり形式ばらず、終始リラックスして、普通の感じで行われるようだが、**図38**が示すように、普段着のまま、あまりはでにならないように、よい意味で親や子ども同士が配慮しあっている様子もうかがえる。

裏をかえせば、誕生会がそう特別なものではなくなってきているのだろう。

図33　友だちの誕生会によばれるうれしさ

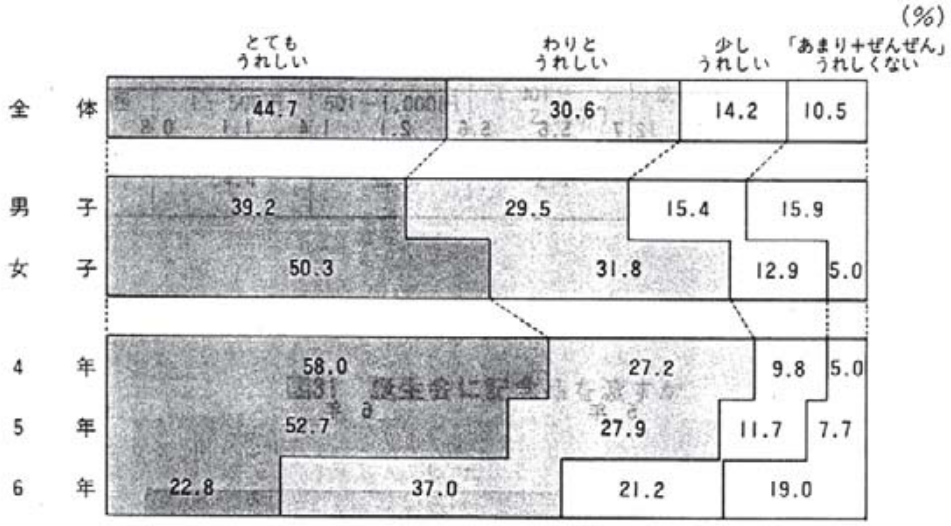


図34　誕生会にカードや手紙を書いていくか

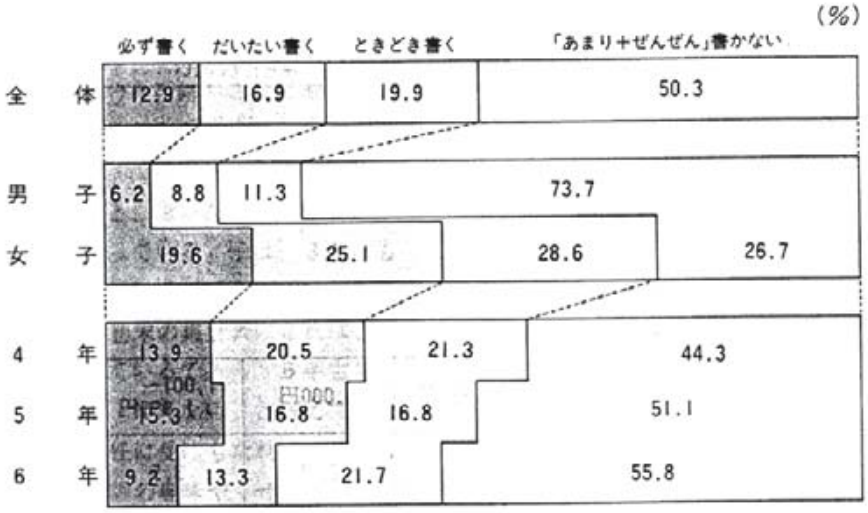


図35　誕生会にプレゼントを持っていくか

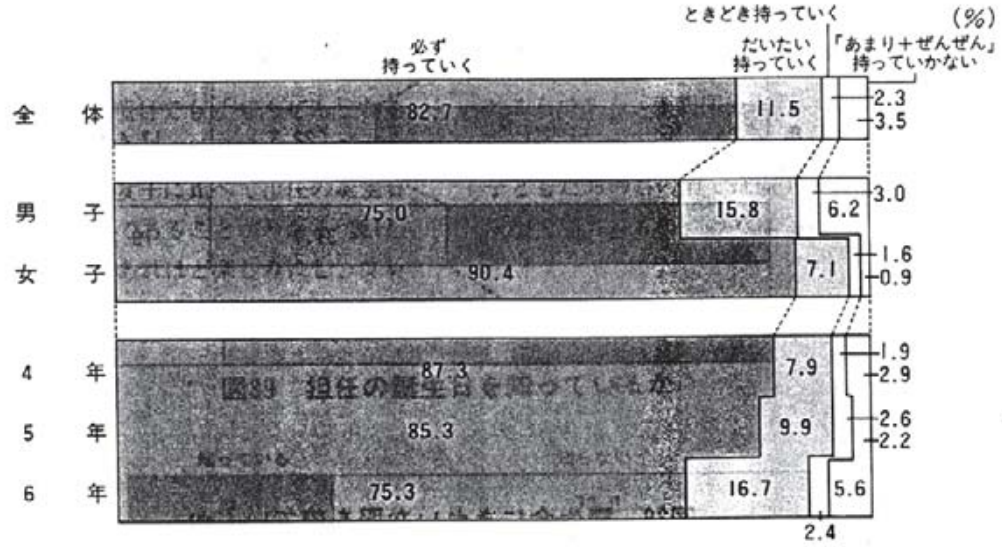


図36　手作りのプレゼントをするか

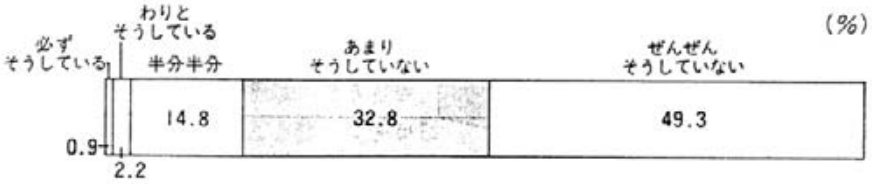


表15　持っていくプレゼントのだいたいの額

金額の範囲	1～499円	500円	501～999円	1,000円	1,001～1,999円	2,000円以上
割合(%)	12.6	33.1	19.6	28.8	3.5	2.4

(平均 747円)

図37　プレゼントのお金の出どころ

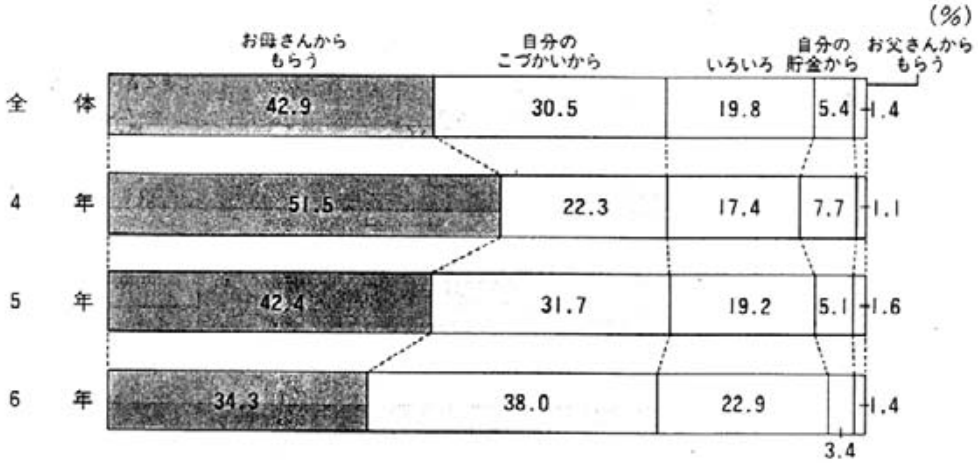
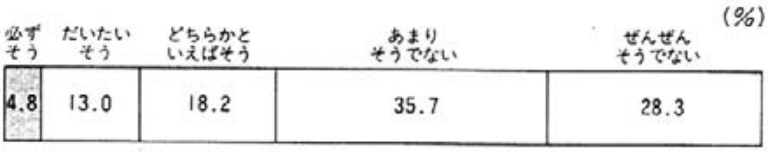


図38　誕生会にきれいな服を着ていくか



担任・両親の誕生日

最後に、子どもの身近にいる教師や親の誕生日を、子どもの目からとらえてみることにしたい。

まず**図39**をみると、驚いたことにクラス担任の誕生日を「知っている」子は、3割にも満たない。男子で「知っている」子は約20%と少なく、しかも巻末の集計表によれば、2年近くもつき合っているであろう6年生でさえも、8割近くは「知らない」と答えている。2年続けて同じ担任に受けもたれていれば、少なくともその教師の趣味やくせ、血液型や誕生日くらいは知っていてもいいはずであるのだが、最近の教師と子どもの関係は、学習上の結びつきだけで、個人的な部分での結びつきは、弱くなってきているのであろうか。

さらに**表16**をみると、子どもたちからの担任に対する誕生日のコンタクトが非常にひややかであることがわかる。「おめでとう」と「いつも」言う子は10%で、40人のクラスとすれば、わずかに4人が祝福してくれるにすぎない。その他の項目でも、「ぜんぜんしたことがない」と8割前後の子が答えている。

とくに、男子は女子に比べて担任の誕生日には無関心のようであることがわかる(**表17**)。

自分の誕生日をあれほど楽しみにし、プレゼントの山の中にいる子が、毎日一緒に暮らす担任にも誕生日があることに気づかないはずはない。つまり、してもらうことは当たり前、してあげることにはおっくう、という現代っ子の自己中心性や他人への思いやりのなさが表れた結果とも言えそうだ。

それでは子どもたちは、両親の誕生日をどう見ているのか、**図40**と**図41**を比べてみてゆくことにしよう。

これによると、両親の誕生日には「ときどきそう」までを含めて、「家族がおめでとうを言い」(約75%)、「夕はんがいつもよりごちそうになり」(約75%)、「お父さんがいつもより早く帰ってくる」(約50%)様子が読みとれる。当然、家族がプレゼントをしたり、カードを贈ったり、何かよろこぶことをしてあげて、家族みんなでそれぞれの誕生日を祝福している姿が目に浮かぶ。

しかし「あまり・ぜんぜん」そうでない割合も、必ずしも少ないとは言えず、気になるところである。両親同士が互いの誕生日を特別な日ととらえて、アメリカの家庭のように、子どもたちの目の前で祝福するなど、もっと演出を加えてもいいのではないだろうか。

図39　担任の誕生日を知っているか

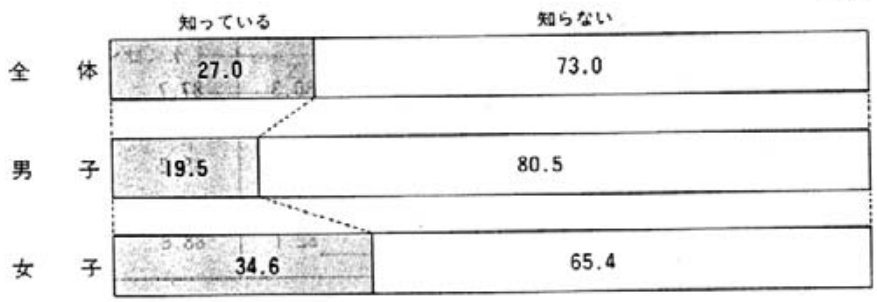


表16　担任の誕生日にすること

(%)

	いつも そうする	前に何度か あった	1度くらい あった	ぜんぜん そうでない (したことがない)
1.「おめでとう」を言う	10.3	12.4	18.2	59.1
2.カードや手紙を書いて渡す	4.1	5.2	12.0	78.7
3.何かよろこぶようなプレゼントをする	4.3	6.6	11.2	77.9
4.何人かのグループでプレゼントをする	2.6	5.6	9.3	82.5
5.みんなで教室をきれいにしたり、花をかざったりする	4.3	5.4	10.6	79.7
6.クラスで何かよろこぶプレゼントをする	2.8	4.7	12.0	80.5
7.クラスみんなで、先生のための誕生会を開く	4.4	3.4	10.3	81.9

◯印はその項目の最大値

表17　担任の誕生日にすること(性別・学年別)

(%)

	全体	男子	女子	4年	5年	6年
1.「おめでとう」を言う	59.1	66.0 ←	52.1	65.5	40.9	70.9
2.カードや手紙を書いて渡す	78.7	85.3 ←	72.2	81.6	69.6	85.0
3.何かよろこぶようなプレゼントをする	77.9	84.2 ←	71.3	82.4	66.8	83.9
4.何人かのグループでプレゼントをする	82.5	86.2 ←	78.9	85.6	78.3	83.6
5.みんなで教室をきれいにしたり、花をかざったりする	79.7	79.1 →	80.3	87.7	62.9	88.1
6.クラスで何かよろこぶプレゼントをする	80.5	82.5 ←	78.2	88.2	69.1	84.0
7.クラスみんなで、先生のための誕生会を開く	81.9	81.7 →	82.1	88.8	68.3	88.5

「したことがない」割合

図40　父親の誕生日の様子

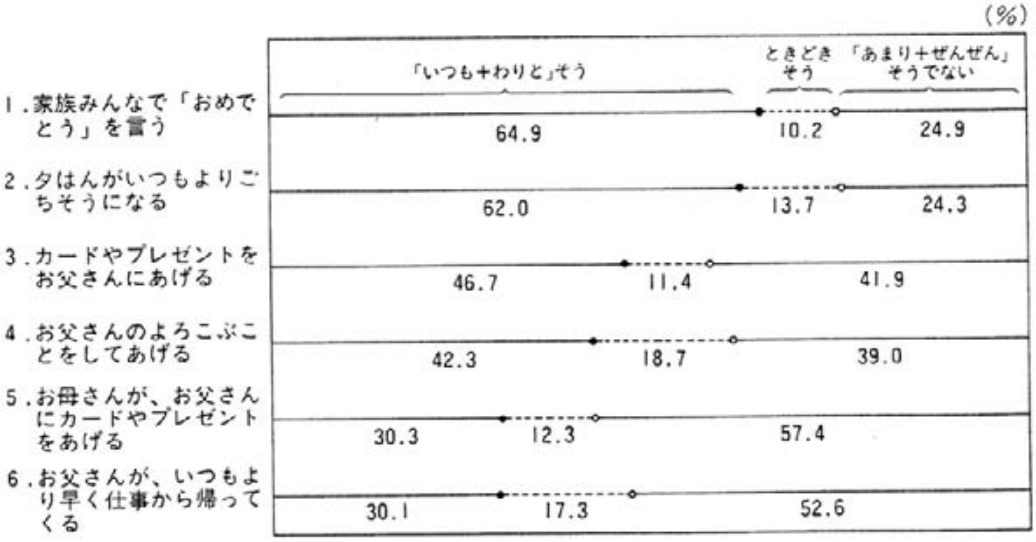
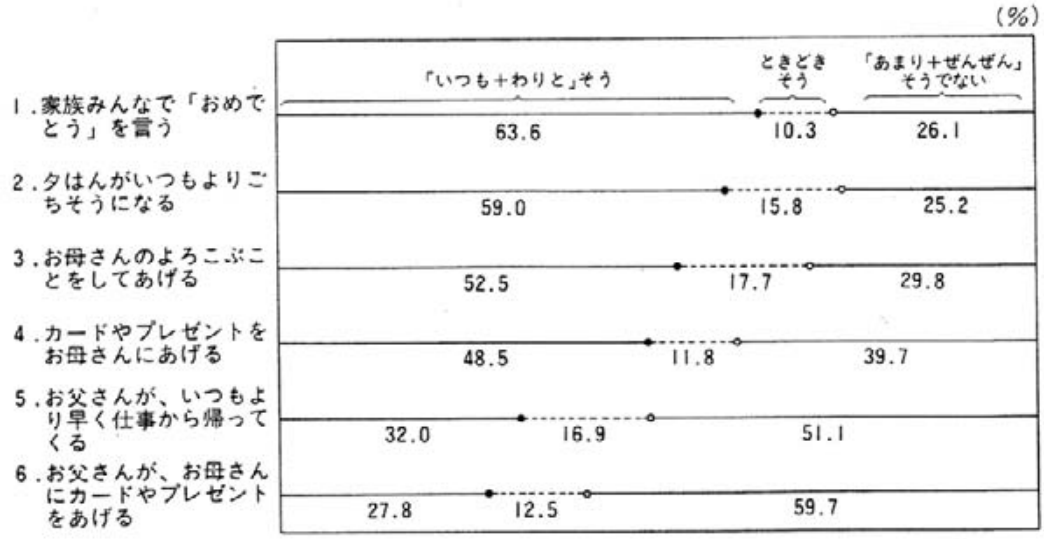


図41　母親の誕生日の様子



付表1　父の日、母の日にしたプレゼントの例

〔父の日のプレゼント〕

女子		男子	
○お父さんの似顔絵	○ハンカチ	○ビール	○ウイスキー
○筆記用具セット	○オルゴール	○手紙をかいて贈る	○ケーキ
○ネクタイ	○バラの花	○チョコレート	○パチンコへ行くお金をあげた
○お　酒	○サンダル	○かたたたきをした	○ゴルフのティー
○ゴルフの手袋	○シャツ	○マフラー	○ペン
○かわぐつ	○おそうじ券	○ネクタイ	○Tシャツ
○植木(サボテン)	○かたたたきを作っておくった	○ライターとパイポ	○くつ下
○くつ下	○ブランデー	○ひげそり	○湯のみ茶わん
○定期入れ	○Yシャツ	○タバコ入れ	○タオル
○たばこ	○コーヒーセット	○ハンカチ	○おまんじゅう

〔母の日のプレゼント〕

女子		男子	
○エプロン	○ハンドバッグ	○花びん	○エプロン
○スカーフ	○ブローチ	○かたたたきをした	○お母さんの似顔絵
○サンダル	○コーヒーカップ	○洋　服	○テレフォンカード
○ハンカチ	○おさいふ	○カーディガン	○湯のみ
○口　紅	○マグカップ	○カーネーション	○ハンカチ
○かたたたき券	○レターセット	○お皿のセット	○コーヒーカップ
○お手伝い券	○手紙や絵をかいて贈る	○ヘアバンド	○はち植えのお花
○ピアス・イヤリング	○セーター	○花たば	○絵
○化粧品	○タオル	○スカーフ	
○カーネーション	○ケーキ	○スリッパ	

付表2　誕生日のプレゼントやお返しの例

〔誕生会でもらった一番うれしいプレゼント〕

女子		男子	
○かさ(パラソル)	○ドレッサー	○ミニ四く	○エアーガン
○写真立て	○レコード	○プラモデル	○スポーツくつ下
○バッグ	○ぬいぐるみ	○マンガ本	○パズル
○ふで箱	○お人形	○ファミコンのカセット	○CD
○オルゴール		○ゾイド	

〔誕生会に来てくれた人にするお返し〕

女子		男子	
○手作りのおかし	○お花	○プラモデル	○文房具のセット
○水とう	○キーホルダー	○シャーペン	○筆記用具
○バッチ	○お弁当箱	○おかし	
○ブローチ	○日記帳	○ハンカチ	
○ハンカチ	○筆記用具	○ノートや本	
○文房具のセット		○ふで箱	

〔自分がよくプレゼントするもの〕

女子		男子	
○小物入れ	○バッグ	○文房具	○マンガ
○人形	○サンリオのグッズ	○プラモデル	○ノート
○貯金箱	○コップやカップ	○ミニ四く	
○文房具	○筆記用具	○めんこ	

おわりに

子どもにとっての誕生日や行事の楽しみ方、祝い方をつぶさに見てきたが、時代により少しずつその順位や種類の変化があるものの、こうした行事は現代でも子どもにとって、生活の節目であり、楽しみの一つであることには変わりがないようだ。しかし行事に伴う種々のしきたりの中で、一番はっきり残っているのは、その行事を象徴する「行事食」であった。しかも昔のようにたんねんに手作りされ、準備された行事食ではなく、買ってきたものですましていることも多そうだ。

しかし行事の祝い方、楽しみ方は何も「食」だけにあるのではない。そのための念入りな準備や行事をもり上げる演出があってこそ、行事は輝きを増すのであろう。

子どもにとってのこうした生活の「節目」について、おとなたちはもっと工夫と気配りが必要なのではないだろうか。そしてこれらの行事を、単に楽しむためのイベントに終わらせるのではなく、本来その中にこめられていたはずの「他人への愛」や感謝、生きることのよろこび、などを表現し、よき地に生まれ、よき人びとと暮らす日々のしあわせを味わうことの手段ともさせたいものである。